

基本情報 ■作者：遠藤速雄(1866～1915) ■時代：明治～大正時代

■寸法：縦195cm 横60cm



この資料のココがすごい!!

人物の衣装や家具など、細かいところまで丁寧に書き込まれていて質感をよく表しています。一方、少し淡く描かれた山々と滝は、見事に中国の景観を連想させます。

お気に入りポイント

今にも動き出しそうな人物、山を落ちる滝の音が聞こえてきそうな作品です。

学芸研究員
遠藤 健悟

学芸研究員の目

実際には見たこともない中国の人物や風景を美しく描き、吉祥を寿ぐ本作の性格をよくあらわしています。『仙台市史』によれば、宮城県に戻ってきた速雄は山河に分け入り、風景を写生したとされます。本作品は、模写や粉本をもとに制作されたとはいえ、作者が日本の山河をよく観察し、描いてきたからこそ人の目を惹く作品になったのかもしれません。

的確な描写と
高度な筆法をもちいた作品

宮城県を代表する日本画家

本作品は、宮城県の日本画家である遠藤速雄(えんどうはやお)によって明治から大正時代に描かれた書画である。

作者の遠藤速雄は、幕末に活躍した伊達家の重臣である遠藤允信(えんどうよしのお)の次男として生まれた。明治9年(1876)速雄が11歳のとき、京都平野神社宮司となった父と共に京都へ移り、原在中に始まる^{*1}原家の四代目原在泉(はらざいせん)に画を学んだ。17歳の頃には、「第一回内国絵画共進会」に作品を出品、入選したことをはじめとして様々な展覧会で賞を得ている。明治24年(1891)には郷里であった宮城県仙台に戻ったが、山水、花鳥、走獣、人物などを画題として様々な作品を描いている。特に、郷土の山河を題材にした作品は、高度な技術と的確な対象描写に特徴がある。また、速雄は「^{*2}名所絵」を得意とし、「宮城十二景」など四季を軸として郷土の諸名所の典型的景観をとりだし一堂に並べて描く作品を描いている。当時の仙台において、京都で本格的に学んだ画人は少なく、速雄の作品は仙台の画壇に新たな風を送り込んだ。

なお、代表作としては「花に寄する故事」「仙南仙北十二景図」などがあり、明治31年(1898)に組織された仙台書画会の代表的人物としても有名である。

本作品について

この書画には唐時代の母娘と思わしき姿が描かれている。両者ともにたおやかな衣服を纏い同じ柄の布で髪を結びあげており、その出で立ちは日本の着物とは異なっている。また、背景の山々と滝は中国の山水画を連想させる。緻密に描かれた人物や花や家具などに対して、背景は水気を含ませ淡く描かれており、折衷的な技法を用いた速雄の特徴が表れている。ただし、唐美人をモチーフに描かれた作品は多くあるが、本作品に関しても当時速雄が直接見て書いたものではないと考えられ、粉本をもとに描かれたものだろうと推測される。

外箱には「遠藤速雄先生」の文字がある。そのため、この書画は作者が一定の日本画家としての地位を確立した以降のものと考えられる。

学芸研究員 遠藤 健悟
実習生 柴田 麻有

参考文献

石田尚豊ほか監修『日本美術史辞典』平凡社 1987
河北新報社編『宮城県百科事典』河北新報社 1982
仙台市史編さん委員会編『仙台市史 特別編 美術工芸』仙台市 1996
辻惟雄『日本美術の歴史』東京大学出版会 2005
宮城縣編著『宮城縣史13(美術建築)』宮城縣史刊行会 1980

用語解説 詳しくはP27へ

*1 原家
*2 名所絵